

おいでませあの世

シロ

「こんばんは、いらっしやいませ、お目覚めですか？」
とりあえず、寝起きにそんなこと言われたもんなら、夢だと思う。俺は日本人で、今時の若者はなんたらかんなら、とじじいどもにぼやかれるような高校生である。つまり凡人、平凡こそ全てで、青春っておいしいの？ という悲しい現実の色に染まっていてる存在だ。そんな人間が、すつきりとしたお目覚めに知らん金髪の子ビっ子から意味の分からない挨拶なんでもらったら非現実っていう単語に辿りつく。

「さーて、二度寝、二度寝つと」

此方の顔を覗き込んでいた翡翠色の瞳が、薄れる視界の端にちよつと形を変えたように見えて、不思議と嫌な予感が湧き出る。胸のあたりに瘡蓋が出来たような感覚が予感を更に悪化させていく。これは夢なわけで、俺は畳六畳に布団を敷いて寝ているはず。でも、切り捨てられない変な思考が、睡魔を退ける。

一度だけ眼を開けてみようか。そんな風に思い、恐る恐る片目だけを開けようとするが、それよりも早く体に大きな衝撃がかかる。

「起きやがれ、この野郎」

なんて素敵な起こし方をしてくれやがったんだと思いつつ、しっかりと両目を開けて原因を見据える。そこに

はやつぱり金髪で翡翠色の瞳をしたチビっ子がいて、人の腹に見事にクリーンヒットを叩き込んでくれた様子がうかがえた。

「起きやがりましたよこの野郎」

余談だが、俺はあまり性格がよろしくないらしい。いや、関係ないんだけどね。

とりあえず鳩尾に入らなかつただけ良心があつたのだろうか。いや、あの起こし方だから悪意ありに違うない。

「ならいいんだ。いつまで寝てるんだか」

「あんたは俺の親か何かですか？ 何で知らないガキンチョに大切な就寝時間を取られなきやいけないんだ。大体、人の夢なら、もうちよつと見てて気分がいいのにしてくれよな」

起き上がってみて、とりあえず現実じゃないんだなあ、と再認識をする。安い敷布団はふかふかのベッドに入れ替わってるし、雨漏りするんじゃないだろうかと思つた天井は白を基調に装飾された洋風の作りになっていた。狭い室内は何故か更に狭くなりベッド一つと背もたれなしの黒い椅子があるだけの洋室と成り果てていた。

「は？ 何を言ってるんだ、お前は。これは夢なんかじゃないぞ」

特に表情一つ変える様子もなくチビっ子が口を開く。

そりゃあもう平然と。

「ここはあの世だ」

漫画のよくある一コマで効果音のように使われている、ポカーンなんて状態は、正に今この瞬間に当てはまるんだろう。そうか、ここはあの世なのか。つまりそれは、俺が死んじゃっているってことなのか。ははは、こりゃ参った。

「参った、ですむかああああ！」

思考と同時に絶叫するが、チビっ子に思ったよりも大人な対応をされてしまう。「馬鹿かお前は。何一人で暴走してるんだ」

「ギャク路線の夢ならこういう展開がお望みかと思ったんだが」

「続けるなら一人でやってくれ、この馬鹿。私を巻き込むな、馬鹿。というか、夢じゃないと言っただろうこの馬鹿」

一回の台詞に馬鹿というワードが三回出てきていることに怒ってはいけないだろうか？ いや、ここでそれを言うのと、うるさいこの馬鹿、と返答が来る気がするから止めておこう。なので、精一杯の嫌みを言うておく。

「俺の名前は馬鹿じゃなくて歩、な。はい、漢字分かりますかー？ 人が歩くなんで時に使う、歩くという字ですよー？」

「ああ分かったよ、馬鹿」

「……言っついて何だけど、なんとなくその返事は予想できたからいいや。此方は名乗ったんだしギブアンドテイクってことで今度はお前の名前を教えるよ」

「勝手に名乗ったのだろう？ 此方に義務はない」

「可愛くないガキ……」

「誰がガキか。こう見えて私は十八だ」

どうみても小学生程度のちんちくりんが十八と世迷言を言っているんだがコレは大爆笑するべきか。きつとチビっ子なりの面白いボケをかましてくれたに違いない。

突っ込み待ちなら盛大に大阪スタイルのどつきを入れてあげるべきだろう。しかし、手を出す前にチビっ子に軽く睨まれたので一度出した手を引つ込める。

「とは言っても、見た目は八歳程度だろうな。死んだのはおよそ十年前のことだし」

「えーと、なんでやねん？」

「頭いかれたか？ この馬鹿」

「すいません、続けてください」

「私もお前のようにここで目を覚まして、死んだと言われただけの話だよ。現実で息を引き取ったのが八歳だったんだ」

「先生、質問です」

「何だ言ってみろ」

「そこは乗るのか……じゃなくて、そろそろ夢の終わりに行きたいんですけど、出口は何処ですか？」

「あつたら教えてやれるんだが、生憎、これが現実だ。お前の遺体は今ごろ土に埋まってるよ」

「せんせーい、それ以上は俺の精神がギブしそうなんで授業止めてくださいーい」

「それはすまなかつた。まだ火葬前だ」

「どちらにしろブラックすぎるんだよ！ 大体、それもう死んでるだろ！」

「だからそう言ってるんだよ、馬鹿」

「……」

嘘を言われているような感覚がしない。もしかして頭は本当にいかれてしまったのかもしれない。チビっ子は間違ったことを言っている、と考えたいのだが、どうもこの世界にはリアリティがありすぎる。手に触れた自分の髪がいつものようだったり、体をずらした時になるベッドのスプリングの音が現実味を引き立てる。これで何か臭ったらそれこそ日常と変わらないのだろうが、何故か服から自分の臭いがしなかった。

「まあ、何で死んだかが分からないんだらう？ こっちもそれが分からなくて困ってる所だったんだ。すまないが死ぬところまで見てきれくれないか？」

「えーと、意味がわかるように説明して欲しいんだけど」

「死んだ人間ってのは記憶をしばらく忘れてて、特に、死んだ日の朝あたりからの記憶がないんだ。だから、此方が死んだ人間を見逃してここに運ばれてきた場合、死

因特定のために記憶を辿ってもらって特殊な形を取るんだよ」

とりあえず混乱状態で理解できたのは結局状況は変わらず、俺は死んでいるということだけだ。

「冗談に聞こえるかもしれないが、実際にやってみれば分かる」

「心の準備とかはなし？ 心臓止まったらどうするんだよ」

「大丈夫だ、もう止まっている」

自分で言っていて、言われて、気付く。人間が生きるために必要な心臓の動き。ポンプのように血を体中に送り続け、それが停止すると死が迫ってくることになる。それは運動していても、寝ていても、変わらず動き続ける。

そっと、手を胸に当てる。音がしなかった。聞こえていて欲しい鼓動が、あるべきはずの温もりが伝わって来ない。脈打つ大切な器官が停止しているという事態は思ったより頭に響く。

死。その実感。夢落ちであることを願い、理性をどうにか保つ。

「それで？ 俺にどうしろと？」

「とりあえずもう一度寝てもらおう。自分の記憶を辿るだけだが、私にはそれを見ることは出来ない。起きてきたら私に死因を教えてくれればいい」

「……その後は？」

言いたいことが伝わったのかチビっ子が気付いた様子で言う。「大丈夫だ、取って食いやしない」

そこで初めての笑顔を見せる。それは思ったよりも、

「お、いい顔」

「……早く寝やがれ、この馬鹿」

そこで意識が飛んだ。

——ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

「ん……んあ？」

耳元で愉快になり響く携帯のアラームを切りつつ、目を擦る事二秒、先ほどの出来事がフラッシュバックしてくる。毛布を蹴飛ばしその場から跳ね上がり、心臓に手をあてた。

「え？ まじで？ もしかして二重の夢落ち？」

鼓動の反応なし。これは冗談抜きで死んでしまっているらしい……？ 記憶を辿っていて心臓が今動いていないのであれば、もしかして布団の中でこの世とおさらばしたことになるのか？ いや、実は夢落ちで物語終了ですよ、なんて結末かもしれない。その方が大いに結構なんだが、体中に響く声が希望をあっさり花粉々に砕く。

「あーあー、こちらあの世の者だ。おはよう」

「ちよ、何処から声だしてんだよ！」

「うむ、感度良好」

「俺はラジオのアンテナじゃねえ！ ていうか、話を聞きやがれ！」

「少し落ち着け、馬鹿。その問いの答えは、お前の頭の中だ、と言えは分かるだろう。ちなみにこの交信は後数十秒しか持たないからよく聞かがいい。今いるのは記憶を辿っているだけの世界でお前の記憶が創造した世界ということになる。ただ、基本的にはお前の思うと通りに動く世界構成だが、死ぬことに関わった出来事は強引にだが実際あったように再現される」

「作者のご都合主義つきの世界だけど、編集者が勝手に別のエンディングを作っちゃってる感じ？」

「……何を言っているか分からんぞ」

「あー、つまりはだなあ——」

「なんだっていい、もう……これ……」

「いやいや、まだ聞きたいことたくさんあるんだけど……!?」

「……ば……か」

最後にしつかり馬鹿呼ばわりしていきやがった。本当にいい性格の持ち主だ。そりゃあ成績がいいかと聞かれたら、もちろん悪いと胸張って答えられる程度の成績を取っているけどね。

勉強ついでにふと何かを思い出す。今日は何か予定があった気がする。壁に貼ってあるネズミのポスターが本

日は土曜日であるということを示しており、日付の下に黒の汚い字で何か走り書きがされていた。

“数学補習。午前十時半から！”

只今時刻九時五十分ジャスト。学校までは自転車でも十分程かかることを考えると、まだあまり急がなくてもいい時間帯だ。朝ご飯を取る時間があるっていうのは大きな利点の一つである。いや、記憶の中なのだから体力は無等大なのだろうか？ ただ、腹の虫が騒ぎ立てるのを聞く限り、エネルギー源を摂取する必要性があるらしい。デートとか、旅行とか気の利いた予定だったらよかつたのにも思いつつ、二階の自室から一階のリビングへと足を運ぶ。そこには朝食の食器を洗い終えた母親がテレビを見ていた。

「おはよう」

「あら、珍しく早いこと」

「今日補習あんの。十時近くになって朝早いって言うのかね、普通」

「休みの日は昼すぎまで爆睡してる子がよく言うわね」

「……ごもつとも」

「ご飯食べてくんでしょ？」

流石は自分の親だけあって息子のことをよく理解している。いや、そう思いたいからこんな映像で親が映し出されているんだろうか。まあ、あまり代わり映えしていないと思うけど。

ご飯やら、味噌汁やらごく普通の食事が並べられていく。鼻はしつかりとその臭いを感じて、腹に居座る虫がさらに機嫌悪く怒鳴りたてる。とりあえず、電子レンジで温めなおされたシャケをつまみ、ご飯をかき込んでご機嫌取りをしておいた。

味噌汁の二杯目に手をつけたころ、ニュース番組の左上に表示される時刻が十分を示す。補習は十時半からで多分大多数の生徒が遅刻してくるだろうと踏んで、四十分につけば問題ないだろう。だからご飯もおかわりしておこう。

「あれ、そーいや親父は？」

お新香を一つまみしながら、母親に尋ねる。

「まだ寝てるわよ。本当息子にそっくりなこと」

「それ逆」

「ところであんた、学校は何時からなの？ 自転車壊してるでしょ、あんまり遅くならないうちに出発するのよ？」

「……………え？」

「え？ じゃないでしょ。フレイムひしゃげて持ち帰ってきたのは何処の誰よ」

記憶をちよつと辿って見るが何故そんな事態になったのか思い出せない。これも障害の一つなのだろうか。ここから走って学校に行っただとしても二十分で行けるはずがない。まあ、ここは落ち着いて最後のご飯を口に含ん

で、味噌汁を片付けて、熱いお茶を一すすりして朝ご飯を締め、余韻を味わいつつ一言。
「さーて、走るかあ」

「学校か？ 歩」

「そうそう。じゃあ行ってくる！」

即行で用意を終えて、寝起きの父親に挨拶をして家を飛び出す。補習に必要な物だけを入れたエナメル製のシヨルダーバックを自転車の前籠にぶち込めないのが悔しいが、ここは文句ばかり言っているでも始まらないだろう。久しぶりに気合入れて走るしかない。

五分もしない内に足が休ませてくれとせがんでくる。記憶を辿っているだけなのだからこんなリアルに再現しなくてもいいのに、俺の脳よ。それともあれか？ これはイベント真つ最中ってことですか？ つまり、今走っている、何十メートルか先にある曲がり角で女の子とぶつかるイベントでも待ち構えているということか。

そんな素敵な要素、何で俺の人生に存在するんだ。するはずないだろう！ そうさ、男の子の運の悪さをなめるんじゃない！

どこかでテンションを間違えたのか、左右確認を放置して、一気に飛び出す。同時に蘇る理性が告げる。「あれ？

もしかして俺って、ここで車に撥ねられて死ぬとかだっ
たり？」

死角から飛び出してきたのは、金髪の蒼眼のチビっ子
で……

「って、お前かよ！」

そう言って額に指を指してやるが、チビっ子は此方に
気付かず歩きつづける。いや、間違いじゃなく、歩き続
けて俺を通り越していった。指には何の感触もなかった
し、チビっ子が身をかわした訳でもない。つまりはすり
抜けたと言うこと。

これは俺がでっ上げた記憶なのか？ 深層心理では
チビっ子を求めている証拠だとも言えるのか。それでは
まるで変態だ。いくら女運ないからって誰が手を伸ばす
んだ。俺は犯罪者じゃないし、その予備軍でもない！

話がずれて、変な方向へ考えが走ったことに葛藤する
最中、視線が突き刺ささっていることに気付く。もしか、
邪まな考えを感じられたのかとドキドキしつつ、チビっ
子へと顔を向ける。

俺が確実にチビっ子を見ているということに気付いた
のか、その口から何かが落ちた。もしかしてトースト？
なんて思ったが、ただのオニギリだった。しかも特大の。
いや、それはくわえながら走るものなのか？ 外国人小
学生がでかいオニギリを口いっぱい頬張って走っている
というのは随分と絵にならない。そんなくだらないことを

考えてみるが、どうもチビっ子の様子がおかしい。俺を見て驚いているようにしか見えない。それとも、もう顔を忘れたのか。

「おい、どうし——」

「！」
此方が喋っているのを無視しながら、チビっ子が人とは思えない速度で走っていく。それこそ地面をすべっているんじゃないかと思うくらいのスピードだった。数秒もするとその姿は点になりすぐに景色の一部へと溶け込んでいった。

「なんなんだ、一体……」

その場に虚しくオニギリの残骸だけが残された。呆然と立ち尽くして、景色を眺めている場合でないと気付いて、また駆け出す。

それから数十分後、廊下を走ってる所を見つけ更にタイムロスしたが、学校に到着した。

「よし、この問題は……よし歩君」

「わかりません」

「む、そうだ、じゃあ他に……歩君」

「わからないです」

「なら歩君」

「親方、生徒一人に集中攻撃はひどいと思います」

「むしろ先生は、歩君が私を親方と呼ぶことの方がひどいことだと思うんですけどね。大体、補習終了五分前に

来るなんて個人授業を受けたいと言っているようなものだ。ささ、一番前の特等席に座ってくださいね」

十一時を超えた教室にたどり着いたときには、授業はもう終わりかけており、足は白旗を上げた状態に陥っていた。

そこで、優しい大男源蔵、通称親方はそんな俺のためにわざわざ豪華な個人指導を行ってくれているのだ。

机に広げられたテキストを元に親方が問題の解説を行っているが、左の耳から情報が入って、脳が「無理」と投げ捨て、右の耳から捨てられていく。ただでさえ苦手な数学だけにやる気メーターは零を突き破りマイナス値にまで進行していた。

「歩君、外に何が見えますか？」

「平和に飛び交う鳥たちが見えます」

「そうですか。授業聞いてくださいいね」

「……はい」

ノートに黒板の内容を写すが、なんのことを言っているのかわからない。もう日本人向けに作られていないんじゃないかってくらいだ。

机の端の方に落書きがしてあることに気付く。恐らく親方の顔を元に描いてあるらしいが、途中で線が消えて顔がぐしゃぐしゃになっていた。この手の落書きを見るとつい誘発されて隣に似顔絵を描いてみたりして、あまりに似てなくて消すなんてことをしたりする。

親方が解説で黒板に向かい、此方に背を向けている間に鉛筆を走らせてみる。動きは板書する時より滑らかである。特に何も考えずに顔を描いて、髪を描いてなんてやっているとその顔が誰だかじよじよに分かってくる。

「……………」

とりあえず自分に、何やってるんだ、似ていない、と二つの突っ込みを入れておく。輪郭を失った親方の隣には、チビツ子の笑った顔が薄い線で浮かんでいた。というか、何でこいつが俺の中でこんなに出てくるんだ、とため息をつきつつ、外に目を向ける。一瞬だが、何かが落下していく様子が見えた気がした。幻覚でも見るようになったのかと自分を心配しつつ、外を凝視した。

「……………」

視界に映ったのは恐らく上の階から落ちてきた何かだった。いや、何か、ではない。逆さまに落下していったそれは、金髪で着瞳のチビツ子だったのだ。その目が何処を見ていたのかは分からない。ちなみに、ここは学校の三階であり、ここから二階分の高さが下にあり、ついでに地球サマのがある。一秒にも満たない速度で結論が算出される。

「? どうしました? どこか分からない所でも?」

「親方! 空から子供が!」

「……歩君? 大丈夫ですか?」

「ダメです」

「そうですか、授業続けますよ。後、今は数学で美術の時間じゃないですよ」

親方意外と目ざといな、まさかそこに気付くとは。生徒一名だとも自由が効かないものらしい。

「いえ、あの、外に何かありませんでした?」

「平和に鳥が飛んでるんじゃないんですか?」

いや、現状はそうなんだけど、確かに鳥たちが歌っているんだけど、と思うが、それが正しい反応なのだろう。もしかして先ほど見たのは幻で、俺が勝手に作り出した物なのかもしれない。登校中といい、今といい、もしかして俺って常々妄想しながら生きていたんだろうか。これが現実であったとは流石に信じがたい。

元より入らなかつた解説が、残る嫌な感覚で更に身に入らなくなる。まあ、記憶の中なんだし、必死にやる必要ないのだけど。そんな思いに耽ったまま授業が昼過ぎまで続いたのだった。

手持ちのお金は零円。

その事実が付いたのはコンビニのレジに並んでいる時だった。お昼時とあって食堂もファミレスもコンビニも、飯を求める亡者で溢れかえっていた。もちろん、俺もその一人だった。

並んでいる間に財布を出そうと、後ろポケットに手を伸ばすが、いつもの感触がなかった。念のため、鞆の中を探るが、ここにもない。手には小さいオニギリと紙パツクのジュース。学生に足りないと言えば足りないが、貧乏根性がそれに勝っていたのだ。

「よし……大人しく帰ろう」

朝食をしつかりと食べたとしても、青年の胃袋にはもう何も残っていない。そんな訳で、空の胃袋を抱えて帰宅している途中である。

同じ道で、同じ歩いた感じ。だが、何処か違う。行き交う車やバイクが見られないし、なんというか、人氣がなく、世界ががらんとしている感じだ。

疑惑が確信に変わったのはチビっ子が今朝特大オニギリを落とした道の近くになった時だ。道やら、家の壁やらに、深い五本線の傷が走っていた。斬新なアートだろうか、それとも動物園のライオンでも逃げ出したか。ライオンが二階建ての家の屋根に飛び乗って暴れまわっていたらさぞかし危険だろう。だが、ライオンの方がどうやらよかつたらしいと、激しく思ったのは、落ちたオニギリを喰らう何かを見つけたときだ。

その何かは、俺がよく見る形をしていた。毎日当たり前のように見える、少なくとも一日一回は見るだろう、そんな姿だ。四肢で大地を支え、顔を地面へ伏せ、歯を剥き出しにしながらオニギリを飲み込んでいく。ただ、飲

み込まれて消えたはずのオニギリは、オートミール状になってそいつの体からポロポロと零れ落ちる。何かはまたそれを飲み込もうとするが結果は同じだ。それを三度くり返した後、何かが俺に気付く。ぎらついた黒い二つの目が俺へと焦点を合わせていた。

「は……はは」

乾いた笑いが自然と漏れた。これはきつと映画のセツトか何かで人が人為的に作り出した物に違いない。だって、目の前にいるのは、人だったからだ。

もはや化け物であるそれに恐怖し、一步後ろに下がってしまふ。その動きに化け物は敏感に反応した。急にすつと立ち上がり、頭を垂らして、指を波打つように動かし始めた。

気が付くと俺はそいつに背を向けた。関わりたくない、その一心だった。そして振り向いて走り出した先にいたのは、やはり金髪で蒼眼のチビっ子だった。今朝と一つ違うのは、背中に筒状のでかい何かを背負っていたという事。

「お前、な——」

「伏せろ！」

チビっ子が叫ぶと、背中の何かを構えた。ここからは黒い筒の先端が見えており、穴があいていた。チビっ子が筒に取り付けたような筒と同じ色の取っ手を掴んでおり、指の一本だけが何かに引っかかっている。

何処かで見たとのことのある形だったので、頭から必死に情報を引き出す。随分と前の話だが、歴史の教科書か何かで……そうだ、思い出した。確か、火縄銃があんな形をしていた。これの引き金を引かれたら俺の頭は粉々に砕け散って汚い花火を咲かすんだろう。

そう思ったと同時にカチンッ、と音が響いた。

「やった、かな？」

チビっ子がそんなことをいい、銃を下ろす。まるで俺がいないかのような対応をしているが、よく見て欲しい。チビっ子にいきなり命令され、素早く状況判断をして行動し、したこともないブリッジを完璧に決め、この姿勢を維持し続ける俺を放置ときた。

「お仕事終了、と」

更に俺の横を素通りし、何かを確認して満足そうに呟いた。というわけで抗議を開始する。

「おい待て。ちよつと待て。この状況見てみぬ振りってなんだ？ ちよつとは手伝うなりなんなりしやがれ！ 放置プレイがお好みなのか、この野郎！」

「はいはい、五月蠅い人だな、まったたく」

チビっ子がそう言って差し出してくれたのは手ではなく、足だった。抵抗出来ない俺はそのまま頭から地面へと落ちる。鈍い音が響き、激痛が後頭部に走る。そのまま頭を抱えて地面をころころ転がりまわる。ただでさえ悪い頭が余計悪くなりそうだし、少ない記憶も飛んでし

まう気がする。

「何しや……がんだ」

「助けろと言うから、助けたんでしょ」

「そんな殺意が籠った助けをすんな！ とうるか、なんでお前がここにいるんだよ！ 言っていたことと違うじやねえか！」

「……もしかして頭強く打ちすぎた？」

何故かそこに本気で心配されてしまった。もしかして、俺とチビっ子が最初に会ったのはこのシーンで、チビっ子には俺が誰だか分かっていないということなのか？ いや、でもそれはおかしい。じゃあ何で、チビっ子は俺に死因を探してきやがれ、なんて言ったんだ？

「あー、うん、大丈夫」

とりあえず確認したいことがいっぱいある。痛みが引いてきたところで立ち上がり状況を伺う。先ほどチビっ子がぶつ放した銃は、どうやら化け物の額を打ち抜いたらしい。脳天に穴を空けた化け物が仰向けになって倒れている。その手は指がなくなり、刃物のような爪が伸びていた。空いた腹から血が出ていないのと同様に、頭から血は流れていない。

「ところで、その、後ろで倒れているのは何？」

「ああ、こいつか？」

チビっ子は振り返り、化け物をちらっと見る。そして答えた。「逃げ出した魂さ」

「……は？ 魂って、あの魂？」

「そうだよ」

「魂ってこう、なんかふわふわして、燃えているような感じがするんだが……」

「それは人魂。怪奇現象と一緒にするな。大体、あんたなんでここにいられるんだ？ ちゃんと現世と隔離したし、今朝も俺が見えてたみたいだし……もしかして死後管理者逃走魂捕獲課の新人さん？ 俺はまだ教育係じゃないぞ？」

「死後……なんだって？」

「死後管理者逃走魂捕獲課だ。あんた本当に何者？」

「なんだろうそのセンスのない名前だと思ってるけど、訝しげにチビっ子が俺を見てくる。知らぬ存ぜぬだけではここにはいられないらしい。だが、こちらもまったく持って事情の把握が出来ていないのだ。冗談を言っても伝わるような状況ではないし、ここはなんと云えはいいのだろうか。」

考えを巡らせる最中、目に何かが止まった。ほんの一

瞬だが、チビっ子の背後で動いた何か。

「おい、今、こいつ動いたような……」

「え？」

俺から見えたのは、ゆっくりと振り向いたチビっ子と、既に立ち上がって両腕を振り上げた化け物の姿だった。

その時、化け物の顔が歪み、歯が剥き出しになる。アス

ファルトですら傷をつけられるような頑丈な刃は対象を切り裂くために、十本同時に振り下ろされた。そして、まだ幼いチビっ子の体を切り裂く——かなかった。

「え？」

チビっ子がまたそう言う。まだこいつは生きてなくちやいけない。なんせ聞きたいことが山ほど残っているからだ。でも、流石に、痛い、かな。

「は、はは、大丈夫か、チビっ子」

化け物は地面まで爪を振り下ろすと、そのまま動かなくなつた。どうやら、今のは最後の一撃だったらしい。

「お前！ 何考えてんだ！」

恐らく大声なんだろうけど、その声があまり耳に響かない。ちよつと立ってるのもきつくなつてきた。うん、もう、無理。

「しょうがないだろ、とっさに反応しちやっただし」

無理矢理笑ってみせながら地面へと倒れる。また顔ぶつけて痛いんだろうと思っていると、チビっ子が支えてくれた。おかげで地面とキスせずに倒れることが出来た。

「アホかお前は！」

「そうだな、きつと。そうか、死因はこれか……これじやまるでサブキャラの死に方じゃないか……」

記憶を辿る旅はこれで終わるらしく、世界が霞んでいく。何かチビっ子が言っているが、もう聞こえない。

「覚えてやがれこの野郎……起きたら落とし前つけさせ

「やる」

最後にそんなことを思って、目を閉じた。

「夢落ちじゃないんかい！」

とりあえずベッドの上でそう叫んでみた。

「うるさいぞ、馬鹿」

まあ、ベッドで寝ている男が急に起き出してそんなことを言い始めたならそれはそう思うに違いない。そう突っ込みを入れたのはやはり金髪で翡翠色の瞳をしたチビっ子だった。

「再々確認だけど、夢の中でもう一度夢みるように言われて夢みてたつていう落ちはないよな？」

「そんな複雑な落ちはない」

「だよなあ……」

ゆっくりと体を起こしてみると、やはり両腕ともちゃんとついていた。あの時、よく分からないがとっさにチビっ子の手を引いてしまったのだ。おかげで俺の両腕は紙切れのごとく千切れ、そのまま心臓やら腹部やらを切り裂いたのだ。

「で？ どんな死に方したんだ？」

「立派な負け犬人生だった」

「それはお前の姿から想像するのはたやすい。誰がやつ

たか聞いてるんだよ」

「さりげなく人を土足で踏みじらないでくれるか？」

「じゃあ棘付きの靴で踏んでやろうか」

「何でそうなるんだよ！ というか、お前！ 人が助けてやったのに恩を忘れやがって！」

「は？ 何を言ってるんだお前は」

眉を曲げつつチビっ子がこちらを見る。あれ？ デジヤブ？ 同じ顔を生きてたころと、こっちに来た最初に会ったときと同じ顔をされた。いやいや、ここまで来てしらばっくれるとは思わなかった。と、思ったが、何か違う？ そう言えば、記憶を辿って来た時と若干相違点があるような……口調？

「お前ってさ、いつもそんないい口調？」

「勿論だ、この馬鹿」

「わあ、変わらず素敵に罵ってくれるじゃねえか！ つか、お前俺が生きてたころに馬鹿なんて一言も言わなかっただろ！」

「私はお前のような馬鹿に会ったのはさっきが初めてだぞ？」

「へ？」

あれ？ じゃあ、あの記憶は俺が作り上げた偽の存在？ ……もしそうならこの質問には答えられないはずだ。

「えーと……死後管理者とかなんとかって分かるか？」

「何だ、死因にあの世の人間が関わっていたのか……どうりで死んだ瞬間が察知出来なかったはずだ。まったく、何処の馬鹿がやったんだか。顔は覚えてるか？」

覚えていても何もないのだが、と思いつつ、無言でその顔を指さしてやった。

「……何してるんだ？」

「お前が言う馬鹿の顔を指してやっている」

「……」

「……」

「……」

「……」

「入るぞー、お、起きたな？」

沈黙の睨み合いに終了の鐘を鳴らしに、誰かがドアを開けた。そもそもドアがあったのかと思いつつ、その方向を見る。そこには金髪で蒼眼のチビっ子がいた。そこで視線を戻す。そこには金髪で翡翠色の目をしたチビっ子がいた。

「……………は？」

「いやー、まさか姉ちゃんの所にそいつが運ばれてるなんて思わなかったよ」

「姉ちゃん……？」

「そうそう、俺たち双子」

「は、はは、紛らわしいことするんじゃないか！ 俺一人馬鹿みたいじゃない！ 落ち！？」

「そうだな、馬鹿」

「相変わらずきついこというな、姉ちゃん」

「しかも、お前女？ え？ 嘘だろ？ こんなのが十八の女には見え——」

「黙れ馬鹿」

「い、いだけだ！ 痛い、痛いつて！ 足つねるな！」

「仲良く漫才してるのはいいんだけど、姉ちゃん、後任したよ」

「どういうこと？」

「あー、ちよつと黙ってて。俺はこれから出張だから」

「何で私が……」

「あの一、放置しないで欲しいし、話が見えないんですか？」

足の痛いから開放されると、目の前の同じ顔をした二人が真剣に話し合っており、此方には原因がまるで伝わってこない。ただ、一つだけ言えるのは、なんだかこの後のことで嫌な予感しかしないということだ。

「あんたにはこれからここで死後管理者の一員になってもらうことになる。それで、俺と姉ちゃん責任持って面倒みるようになったから」

「はい？ え？ どういうこと？」

「ようはこれからここで働けってことだ」

「はあああああああああああああああああああ！？」

「——はっ！」

シエスタから目覚める。

「なんだ、夢——」

「じゃないと言っているだろうこの馬鹿。さっさと働け」

「……もう夢落ちにしてくれよ！」
絶叫虚しく空回り。

え？ 結局何してるかって？

はは、決まってるだろ？